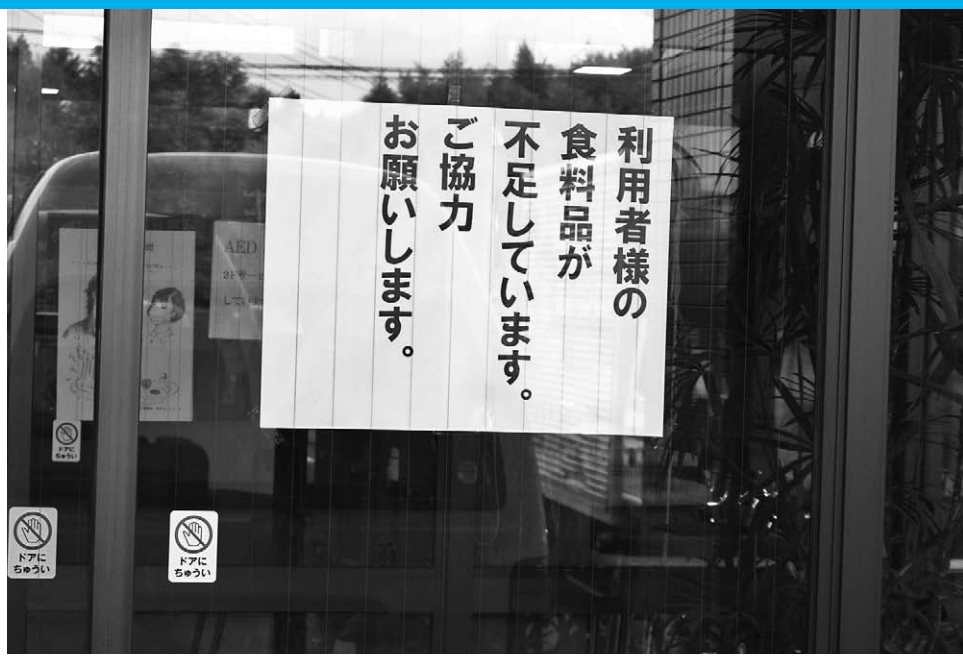


相馬市の福祉施設の入口には、食料の支援を求める張り紙が。

「届かない被災地」に物資を！必要なものを、必要な人へ

コープふくしま・震災対策本部

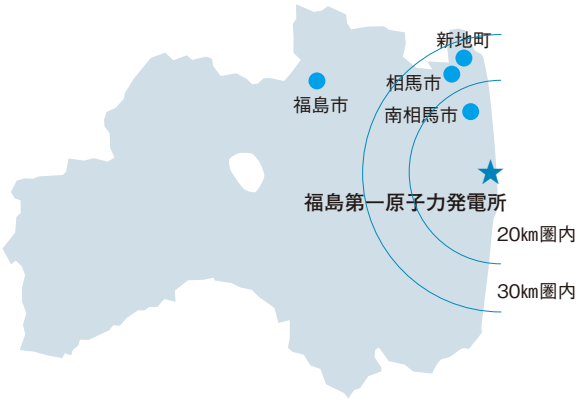
「被災者に物資が届かない」――という悲痛な声が、
こんなにも数多く、そして長期にわたり聞こえてきた災害が
これまであっただろうか？
地元に張り巡らされたネットワークを生かし、
そうした状況に立ち向かい役割を見いだしていった、
コープふくしまの挑戦を追った。

「届かない」事態をつくった原発事故という〝見えない津波〟

他の被災地と福島県の最大の違いは、原発事故の存在。そして、それに伴う退避指示区域が設けられたことだ。これが被災地への支援物資の輸送に大きな問題をもたらしている。

問題はまず、自主避難区域に設定された東京電力福島第一原子力発電所（双葉郡大熊町）から30㎞圏内に、支援物資を運ぶトラックなどが入らなくなったこと。もちろん現状では、「自主避難が望まれている」にすぎず、域内で生活している人もいる。だが物資が入らなくなったことで、スーパーなどは軒並み休業し、生活が成り立たない状況になったのだ。

また、退避指示が出た20㎞圏内に住む人を中心に、いったん避難した人が



水田だった場所は、２週間たっても海水が溜まったまま。

自動車が家屋に流れついていた。

津波で流され、家屋を包み込む農業用ビニールハウス。南相馬市の沿岸部では甚大な被害が出ていた。

さらに「再避難」という形で、数カ所の避難所間を頻繁に移動したことも支援を難しいものにした。「どこの避難所にどれだけの物資が必要なのか」という情報が入り乱れ、支援物資の効率的な配送が滞ってしまったのだ。

そして、これは原発事故が直接的な理由ではないが、広範にわたる被災に、国や県などが物資を必要量確保するところまでは動いたが、「それを届け切る、きめ細やかな手段を準備しかねていた」ということもあったようだ。

いずれにしても原発事故が主因となり、県内沿岸部の被災者、とりわけ津波被害に対する支援が遅れ、「原発は目に見えない津波ですよ」という声も聞こえてきた。

なぜ物資の豊富な避難所と乏しい避難所があるのか

コープふくしまでも、震災直後より避難所などへの支援物資輸送に着手した。だが、物資を届けるたびに「届かない状況」を目にすることになる。

「福島市内の避難所でも、場所によって全然状況が違う。同じくらいの数の避難者がいる避難所の間で、届いている物資の量が大きく違うので驚いたんです。どうなっているんだって」（野中専務理事）

物資輸送がまひ状態にあることを感じ取ったコープふくしまは、「本当に必要としている所を探し出し、物資を届ける」という方針を決める。各所から情報を集め、「物資の足りていない避難所」に生協として優先して支援物資を運ぶようにした。また、「避難所に行かず、自分たちよりも大変な人がいると言って物資不足に耐えている在宅者や福祉施設」も対象とした。そのために、まず電話をかけ、実情のヒアリングに取り組んだ。

「最初は、皆さん遠慮されます。でも状況を説明し『遠慮なくおっしゃってください』というと『実はトイレットペーパーが…』『実は肌着が…』と本音を話してくれました」（野中専務）。そうした実情をダイレクトに吸い上げ、入手可能な物資については配送車を走らせ届けに行ったという。

避難所に入れず、避難もできないそんな人を見つけ、支援する

福島県浜通り（沿岸部）、相馬市に事業所を置く、共同購入部・相双支部による支援物資輸送に同行し、南相馬市、相馬市、新地町の福祉施設、避難所を回らせてもらった。

原発から30㎞圏内に近い場所にあるグループホームへと向かう道は静寂に包まれていた。多くの住民が自主避難し

30km 圏内では開いている店舗はほとんど見当たらない。

全国からの支援者に“今の福島”を正しく伝え、共有する

今回の震災では、全国の生協から多くの仲間がコープふくしまの支援に入っている。その際、支援者の活動が現地にとってより有効なものとなるよう、現地被災情報の共有が重視されていた。支援者の窓口となったコープふくしま管理担当常務の宍戸義広（ししどよしひろ）さんを、日本生協連から派遣された営業本部営業企画室長の大西伸一（おおにししんいち）が補佐する形で、

- 沿岸部では、岩手、宮城と同様の津波被害が出ている
- 原発事故の影響で遺体の回収もままならない地域もあり、地元住民が心を痛めている
- 福島市内でも、建物の内部はかなり被害が発生している
- 燃料不足は深刻で、店舗で日常業務に従事するスタッフ確保にも支障が出始めている

ことなどを説明し、その上で各種業務への割り振りを行なった。また、支援者の中でリーダー職の方には、福島市内よりも甚大な被災地域での支援活動に参加してもらうようにし、福島県の被災状況を正しく理解する機会を設けていた。

到着した支援者に状況を説明する宍戸義広さん。

たと見られ、避難時に放していったのかペットとおぼしき犬が街中を歩き、走る車もほとんどない。グループホームに着くと、責任者の方が真っ先に出迎えてくれた。

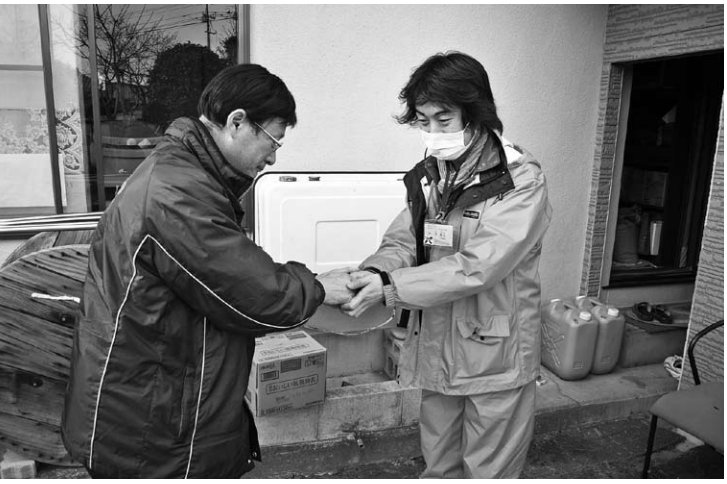
「今回の震災で職員が1人亡くなりました。避難した者もいるので、いつもよりもかなり少ない人数での運営を余儀なくされています。正直、ヘトヘトですね。今、ボランティアを募集しているところなのですが……。報道もされている通り、物資は避難所には届きますが、この施設には届きません。お店も閉まっており、買いに行くことも簡単にはできません。本当に困っていました」と、責任者の方は、思いがあふれたように言葉を連ねた。

認知症患者も多く暮らすこの施設の人びとが、避難所で生活するには困難が伴う。遠くまで買い出しに行くのも、人手、そしてガソリンが入手困難なため難しい。そのような場所で歯を食いしばっていたのだろう。帰り際に、相双支部長の佐藤哲夫（さとうてつお）さんは呼び止められた。

「あの、握手してもらってもいいですか……」

それは、とても力強い握手だった。

被害の大きかった沿岸部に物資を届ける。



相馬市の福祉施設に物資を届け、握手を求められる相双支部長の佐藤哲夫さん（左）。

この日運んだのは、ツナ缶、トイレットペーパー、水、菓子、下着、子ども用のおもちゃなど。

誰がどこで困っているのかを憶測で判断しない

「我慢強い」人たちの本音を引き出せたのは、地元の生協という身近さが大きかったのは間違いない。今回の震災では、その規模の大きさから、被災者でありながらさらに大きな被害を受けた地域の支援を考えている人が多くいる。誰もが「自分を後回しにしなければならない」そんな気持ちを持っているように見えた。

だが、復興までの道のりを冷静に考えれば、我慢をし過ぎず、必要なものは必要だと言うことも大切だ。そうした意味で、「本当に困っている人を見つけだし、支援する」というコープふくしまの取り組みは意義深いものといえるだろう。

こうした姿勢は、コープふくしま内で継続して貫かれている。緊急的に避難所、福祉施設などからヒアリングを開始したが、各支部の体制が整ってから

は、組合員一人ひとりの安否確認を開始。状況を聞き、困っていることがないか丹念に聞き出す作業を続けた。支援に入った日本生協連のスタッフがその結果を詳しくデータにまとめ、地域や組合員が置かれている正確な状況の把握に努めた。

川俣町の古川道郎町長（中央）を訪ね、避難所の運営状態を聞く。

飯館村の職員の方（左端）と、今後の継続的な支援の形について相談を行なう、コープふくしま専務補佐の加藤周さん（中央）と日本生協連・総合マネジメント室室長の照井雅史。

さらに、状況の変化に合わせて、その都度市町村に赴き、何かできることがないかを聞き出している。実際に足を運ぶと、思わぬニーズが出てくるという。3月26日、南相馬市役所を訪問すると担当者から、

「震災から2週間がたって、避難所でのくらしに疲れた方、一時、親戚などに身を寄せていたけれど戻ってきている住民の方が増えてきています。それなのにお店が開いていない。だから、満足に買い物ができない状態なんです」

という状況があることをお聞きした。

4月2日に「道の駅・南相馬」で開催された移動販売の様子（上）。なお、商品輸送・開催には、生協共立社、生協ひろしま、とくしま生協、こうち生協、コープおおいたが支援を行なった。

ガソリンも不足しているので、遠くまで買い物に行ける人は一部だ。市では、閉店中の大手スーパーに開店を依頼したが、「政府による屋内退避指示がある限りは、開店はできない」との連絡があったという。

ここにも、助けを必要としている人がいる――コープふくしまは動く。「負けないぞ！　南相馬市」として、4月2日に市と協力して日常の買い物が困難になっている人びとに、生活必需品を提供する移動販売を「道の駅・南相馬」で開催した。「誰もやらないのであれば、生協がやる」――そんな心意気は、地域に勇気を与えている。

（文・写真　秋山健一郎）

柔軟な対応力で活躍する福島医療生協の支援活動

県内の医療生協も病院を拠点に、各避難所の支援活動に当たっている。その中の1つ福島医療生協・わたり病院（福島市）では、施設に被害が出る中、避難所の巡回診療などを実施。

さらに、県立福島東高校体育館に開設された避難所で、約280人分もの炊き出しも行なっている。校舎内の調理室などを使って提供された温かい料理は、避難所で生活する人びとの心の支えとなっていた。

なお、ここでもガソリン不足が支援活動に影を落としていた。例えば、燃料不足のため緊急時に駆け付けることが難しい人工透析患者に病院隣接の施設で一時的に生活してもらったり、医師や看護師も病院の寮のロビーなどに寝床をつくり、そこで待機したという。また長時間の勤務が続く病院関係者の子どもたちを預かるために、臨時託児所を病院内に設置。その柔軟な対応力で、組織の力を存分に発揮している。

「炊き出しができたのは、支援物資として届けられた食材があったおかげ」とのこと。